

# 開かれた学の扉

[Important Cultural Properties]

## 「扉」の建築意匠



美なるもの

東棟 玄関扉

### ■日本の建築美を表現する

2007(平成19)年に登録有形文化財として登録されたノートルダムホール本館、ならびにノートルダムホール東棟の建築意匠について論じてみたい。1929(昭和4)年に建築されたこの学舎は、日本の近代建築に大きな足跡を残したアントニン・レーモンド(1888-1976)設計の建物である。レーモンド夫婦は1919(大正8)年の年の瀬に横浜港に着き、東京にあった帝国ホテル(フランク・ロイド・ライト設計)の建設のため来日した。その後、日本の建築と生活文化の魅力に惹かれ、人生の半分を日本で暮らしたチェコ生まれの建築家である。

彼は、ヨーロッパやアメリカなどにおける自然を閉ざす建築ではなく、自然を取り入れ自然とともに共存する開放的な日本建築に惹かれた。特に、地方にたたずむ伝統的な日本家屋には新鮮な思いで接し、日本固有の建築が持つ素晴らしいしさに感動した。彼は、「自然は、人工よりも美しい。簡素と軽快は複雑より美しい。」という言葉を残している。

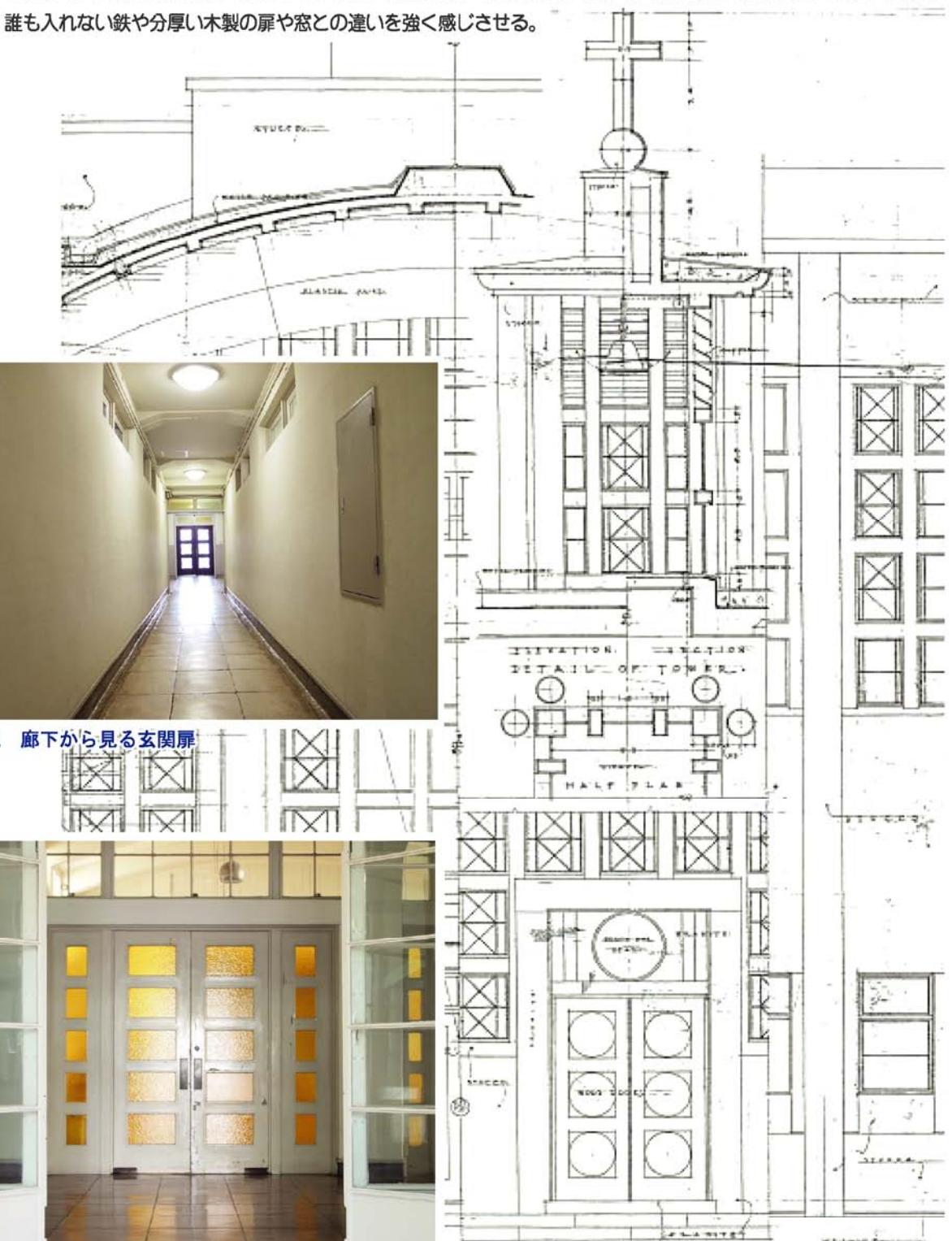


東棟 玄関扉

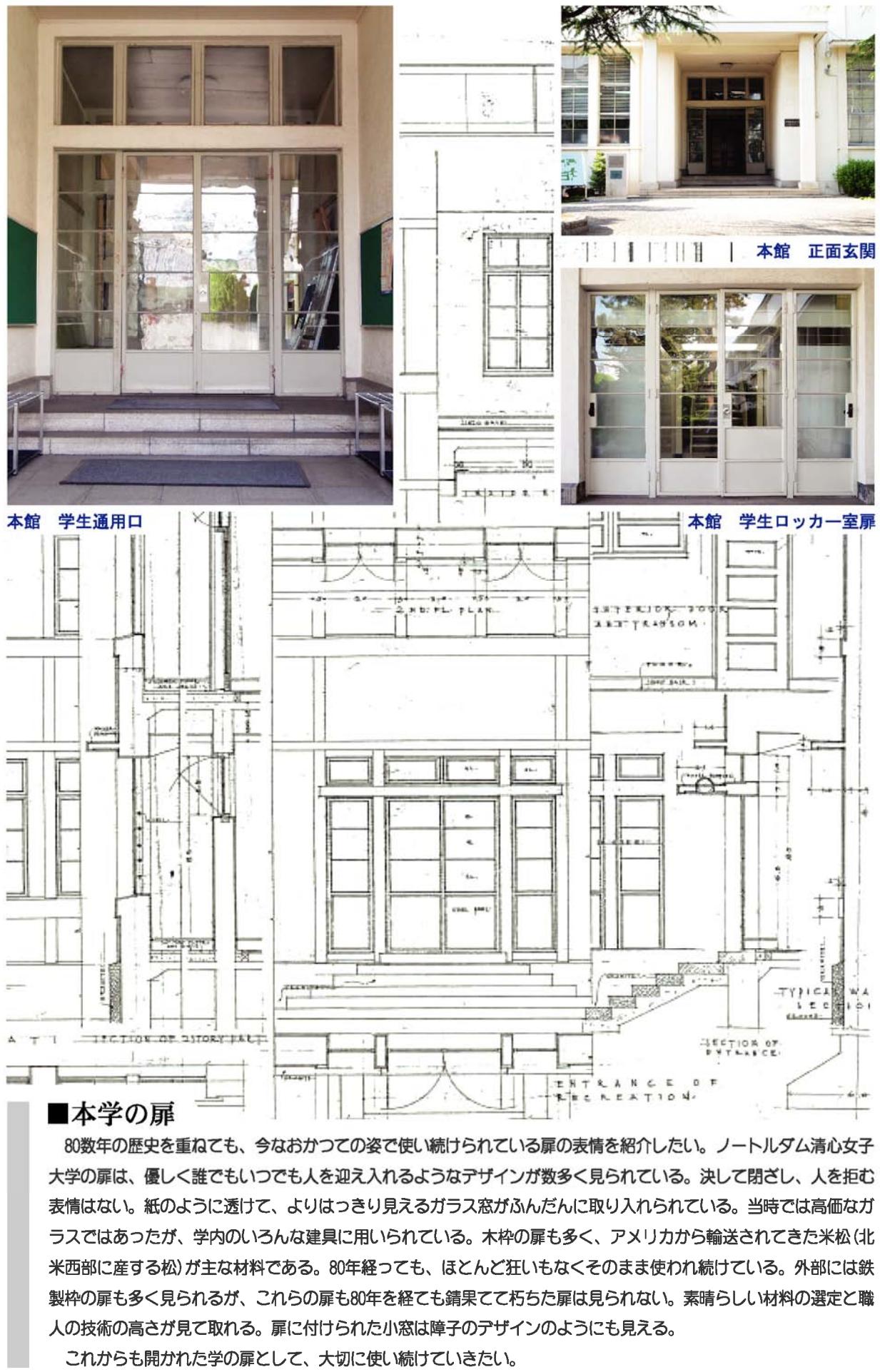
## Important Cultural Properties

### ■扉への思い

本学の扉に目をやると、日本の木造民家における障子・襖をはじめとする建具(可動の戸や窓、襖、障子など)に非常に影響を受けていることがよくわかる。光を通し、光を透かす窓や入り口に、彼は設計のヒントを得たと考えられる。扉に込められた思いは様々である。憧れの扉。希望の扉。明日への扉。未知を探る扉。様々な思いが人にはある。ノートルダム清心女子大学の扉には、かたくなに閉ざす扉はみられない。アントニン・レーモンドは、日本の伝統的で開放的な木造住宅の住まい、住宅の窓、出入り口の造り方に影響を受けた。即ち、木と紙と草と土によって造られていた日本の伝統的な住まいである。日本の建具は、薄くて軽くて光が入りやすく、閉ざされた西洋の石による建築ではなく、人の進入をかたくに拒まない明るい意匠が数多く見られる。西洋の人から見ると異様であり、固く閉ざし誰も入れない鉄や分厚い木製の扉や窓との違いを感じさせる。



本館 大講義室(旧講堂)の正面扉



## Important Cultural Properties



本館 大講義室(旧講堂)の出入口



本館 中庭出入口



本館 中庭出入口



本館 中庭出入口

## Important Cultural Properties



東棟 聖堂の扉